

阪神

同大学などによると、地震発生から2年以上が経過した今もハイチでは約150万人がテント生活をしている。病院の復旧も進まず、病院の跡地に建てたテントやプレハブ小屋で医師が診察を続けている。

また、国民の約60%が結核に感染する深刻な状況となっている。

地震で多くの医師が犠牲になり、1人の医師が約100人の患者を担当するなど、医師不足も大きな問題だといふ。

今回の研修は、地震後、ハイチで医療支援をしてきた同大学呼吸器外科の大類隼人助教が所属するNGO「フューチャーコード」が現地で継続的に結核治療を行える人材を育成しようと呼びかけて実現。30年前からハイチで感染症対策に取り組む須藤昭子医師(85)が2人を大類助教に紹介した。ジャッセンさんは地震後、テントでの治療を続けてきた。スカルさんは両親を結核で亡くし、須藤医師の養子となつて医師の

2人は7月16日まで同大学で、レントゲンを使った診察方法などを教わり、手術の見学もする。また、神戸市保健所を訪れ、感染症に対する行政の取り組みを学ぶ。

11日は同大学病院内を見学。ジャッセンさんは「病棟がとてもきれいで、たくさんのこととを学べそう」。バスカルさんは「ハイチに帰ったら学んだことを周囲の医師と共にして治療に取り組みたい」と話していた。

結核からハイチ守る

10年1月の大地震で30万人以上が死亡したハイチから2人の医師、グリー・ジャッセンさん(38)とジエルタ・パスカルさん(32)が来日し、兵庫医大(西宮市武庫川町)で研修を受けています。結核など感染症の治療法について7月中旬まで学ぶ予定で、2人は「日本で学んだことをハイチの医療の発展に生かしたい」と意気込んでいる。 【米山淳】

【米山淳】

兵庫医大で2医師研修

——西宮



兵庫医大病院内を見学するパスカルさん（右）
とジャッセンさん＝西宮市で